

## 谷崎潤一郎『細雪』論

—「家運の挽回」を断念する鶴子—

小林 珠子

### 一 はじめに

谷崎潤一郎『細雪』は、三女雪子の結婚問題や四女妙子の恋愛問題を中心に話が進んでいく。本来は本家で暮らすべき雪子と妙子であるが、この二人は分家に暮らす次女幸子のもとを頻繁に訪れ、そこで多くの日々を過ごし、物語世界に登場する頻度も高い。そのせいもあつてか、先行研究では、雪子、妙子に焦点をおいたものや、雪子、妙子と頻繁に交流する幸子に言及するものが多く見られる。しかし、蒔岡家にはもう一人娘がいる。本家を継いだ長姉鶴子だ。三人の妹たちと比較してみても、本作における鶴子の存在感は決して弱いものではないにも関わらず、先行研究において鶴子に焦点をあてて詳しく言及したものはほとんどない。たつみ都志は、『細雪』は発表にあたり題名を「三寒四温」あるいは「三姉妹」を候補にしたように、鶴子を省く、幸子、雪子、妙子の物語であることは明白である<sup>①</sup>と指摘する。「細雪」瑣談<sup>②</sup>において谷崎は、「大体三人の姉妹を主人公にするつもりであつたから、「三姉妹」はどうかと考へたこともあるし、「三寒四温」といふ考<sup>③</sup>もあつた」と述べているが、「大体三人の姉妹を主人公にするつもりであつた」という発言は、「物語」から「鶴子を省く」ことを意味しているのだろうか。鶴子は六人の子どもを育てながら、上本町にある本家で生活している。彼女

は夫辰雄の転勤により、人生で初めて住み慣れた大阪の地を離れ、東京へ移住する。本家の東京移住は、雪子の見合い話や妙子が洪水被害に遭遇する話と同様に、本作における重要な出来事の一つである。東京移住を契機として、鶴子の姿は三人の妹と同様に頻繁に登場することになる。とりわけ澤崎との見合いや両親の年忌が行なわれる下巻において、鶴子の存在感は強くなる。谷崎の「大体三人の姉妹を主人公にする」という発言は、必ずしも主人公から「鶴子を省く」ことを意図したものでなかったといえよう。

さらにたつみは、「船場という特権地域で育ち成人した長女鶴子が、結婚後そこを出て上本町へ落ち、また再びそこを出るはめになって東京へ落ち、ていく。こういった鶴子の「没落」は同時に旧大家「蒔岡」の没落の象徴である」(傍点原文ママ)と指摘する。しかし、蒔岡家は父の代からすでに傾き始めており、「父が亡くなり、それと同時に蒔岡家の栄華も終りを告げ」(中・二十四)ているのである。鶴子が東京へ「落ち、ていく」以前に、蒔岡家の「没落」は始まっていたのである。野口武彦は東京移住を決断した本家夫婦を、「意識的に旧家意識を離れようとして東京に転勤する経済人であ」ると評している。山本健吉も「本家の辰雄・鶴子夫婦が東京へ行くことは、蒔岡家の本家としての格式高いうるさい「生活の定式」を棄てて、並の市民として都塵の中に埋没することである。事実、彼らは場末の手狭な安普請の借家に、旧家としての見栄や誇を棄てた気安さの中に、つましい実質本位の生活を始めるのであり、これは別の意味では、封建的環境を振りすてた自由な近代市民の蘇生と云へるのである」と述べる。鶴子夫婦とともに東京で暮らす雪子は、「兄さんは今度支店長になつて月給も上り、それだけ懐にも余裕を生じた筈なのであるが、万事が大阪時代から見ると締まり屋になつた。姉ちゃんも兄さんの旨を含んで、驚くほど儉約になり、日々の台所の買ひ物なども眼に見えて始末をする」(上・二十六)と述べる。「懐に余裕」が生れたにも関わらず「締まり屋」になり、「儉約」に努め「つましい実質本位の生活」を送る鶴子だが、大阪時代と変わらない部分も持ち合わせている。

幸子は、嘸かし姉が所帯褻れをしてゐるであらうと想像してゐたのに、思つたよりは髪かたちも小綺麗に、身なりを整へてゐるのを見ては、どんなになつても嗜みを忘れないところのある姉に、感心しないではゐられなかつた。十五を頭に、十二、九つ、七つ、六つ、四つと云ふ六人の子女と夫の世話をして、女中を一人しか使つてゐないのでは、もつとく／＼取り乱した、見えも外聞もない風体をし、実際の歳より十ぐらゐは老けて見えてもよいところだのに、ことし三十八になる筈の此の人も、さすがに此の姉妹たちの姉だけあつて、五つ六つは若く見える。(中・十五)

幸子は、女中の数を減らし、切り詰めた生活の中においても、嗜みを忘れず老いを感じさせせることもない鶴子の姿に、「さすがに此の姉妹たちの姉だけあ」と「感心」する。「場末の手狭な安普請の借家」で「つましい実質本位の生活」を送る中でも、鶴子は蒔岡家の娘としての品位や特性を保持し続けているのである。また、鶴子は東京弁を「覚えよう云ふ氣イ」もなく、バスの中でも「大阪弁で話しかけ」、「外のお客がみんな姉ちゃん顔見る」ため雪子が「難儀」な思いをしているときにも、「平気で話してる」(上・二十六)。この話を聞いた妙子は、「姉ちゃんは旅にでも出てる氣持やるか」(上・二十六)という感想を洩らす。東京移住を決断し、移住した直後の鶴子は「旧家意識を離れ」る氣や、「封建的環境を振りすて」、「自由な近代市民」として「蘇生」する考えはなく、一時的に家を離れる「旅」のような心持だつたのではないだろうか。ではなぜ、鶴子は大阪を離れようとしたのであろうか。東京移住を決断した鶴子に対して、幸子は次のように述べている。

姉と云ふ人は、早くから母の代りに父や妹たちの面倒を見た人で、父が亡くなり、妹たちがやう／＼成人する頃には、既に婿を迎へて子持ちになつてゐる、夫と共に傾きかけた家運の挽回に努めると云ふ風な廻り合せになつたりして、四人の姉妹のうちで一番苦勞をしてゐるけれども、又或る意味では、一番旧時代の教育を受けてゐるだけに、昔の箱入娘の純な氣質を、今もそのまゝ、持つてゐるところがあつた。(上・二十一)

蒔岡家の長姉である鶴子には、妹たちとは異なり没落しつつある家を再建する責任がある。辰雄は過去に、義妹たちや親戚の反対に遭いながらも、経営難を乗り切るだけの手腕が自分には無いことを自覚し、家業を再興するために「より安全な道」として、「店の暖簾を、蒔岡家からは家来筋に当る同業の男に譲」る（上・二）ことを選択する。そして「経済界の変動や何かで、養父の遺産と云ふものが以前のやうには頼りにならなくなつて来た」（上・二十一）ため、丸の内へ転動することを承諾する。「天子様のお膝元」、「東京のまん中の丸の内」（上・二十一）の支店長に任命されるほど、辰雄は優秀な銀行員である。「経済界の変動」を見抜き、「養父の遺産」を頼りにすることなく「家運の挽回に努め」なければならなくなつたことを自覚したからこそ、辰雄は東京への転動を承諾するのである。鶴子はこうした辰雄の意を汲んで東京に移住することを決断したのである。つまり、鶴子が東京移住に踏み切つた理由は、「家運の挽回」を図るためであつただ。しかし、鶴子は物語の終末までこの気持ちを持ち続けるわけではない。鶴子に変化がみられるのは下巻に入つてからである。

## 二 本家から持ち込まれた見合い話

作中、雪子は五回見合いをする。そのなかに、一件だけ本家から持ち込まれた話がある。三回目に登場する名古屋の素封家澤崎との見合いだ。下巻の物語はこの見合いから始まる。澤崎との見合いは「一度手を焼いてからつひぞ積極的に心配しようとはしなかつたのに、今度は義兄が先づ動いて姉に話し、姉から幸子へ知らせて来た」、「珍しい」（下・一）ものである。雪子は澤崎との見合いにおいて、「始めて此方が「敗者」の烙印を捺される側に立たされ」（下・七）る。渡部直己は、谷崎の随筆や日記、書簡の記述から、下巻の「五」節冒頭から「七」節末尾までのどこかで、日本は敗戦を迎えたと推測した上で、澤崎から「敗者」の烙印を捺された雪子の姿に、無条件降伏を強いられた日本の姿を重ねることができると述べる。柴田勝二は「この見合いでの雪子の〈敗北〉は、第一に上方的な価値の崩壊を予告する出来事にほかならな

い」と指摘する。雪子が初めて「敗者」の烙印を捺されたことは、確かに重要な出来事である。したがって、澤崎から拒絶されたことに特別な意味を見出すことも可能である。しかし、幸子がこの見合いで最も不愉快に感じていることは、雪子に「敗者」の烙印がされたことではない。また、雪子を拒絶する見合い相手は澤崎だけではない。澤崎との見合いにおいて重要なのは、それが本家から持ち込まれた話であることなのだ。澤崎との縁談を知らせる鶴子からの手紙を受け取ったときから、幸子と貞之助は「何か唐突過ぎるやうな、いつもの姉に似合はない非常識なところがあるやうな感を抱い」(下・一)でいた。見合いのために菅野未亡人のもとを訪れた際にも、「菅野家からも澤崎家からも、いかにも安く扱はれた感じ」(下・三)を覚える。それにも関わらず見合いに応じたのは、「東京の義兄の立ち場も考へてやらなければならぬ」(下・三)という考えがあったからである。幸子が辰雄に対して配慮を示したのは、見合いを知らせる鶴子の手紙のなかに、「雪子ちゃんとは定めし好い返事をしないであらうが、そこを曲げて承知するやうに、幸子ちゃんから説き付けてほしい、話が成立するしないは二の次として、兎に角行かしてだけくれないと兄さんが困る」(下・一)と記されていたからだ。「いつもの姉」とは異なる「非常識」さを感じながらも姉の要望に應えるために、幸子は気が進まない澤崎との見合いすることを承諾したのである。

澤崎との見合いは「第一歩から此方が弱気にさせられて」おり、見合いの席でも「戦戦兢兢とした、いぢけた気持」を抱え「始終ビクビクし」、澤崎からの返事が届く前から「見合ひの結果には期待を抱き得ない」(下・七)のものであった。澤崎からの回答を待つまでもなく、幸子はこの見合いが不成立に終わることを予測している。澤崎に対して雪子の結婚相手としての魅力を一切感じていない幸子は、澤崎からの手紙で「はつきり「落第」を宣告」(下・七)されたことにも不愉快さを滲ませるが、それ以上に不愉快に感じているのは、「澤崎と菅野未亡人との手紙の書き方、―此の事件の取扱ひ方」(下・七)である。そして、自分たちに不愉快な経験をさせた「責任は本家の義兄に帰する」(下・七)という結論に至る。澤崎との見合いにおいて幸子を最も不愉快させた出来事とは、辰雄の顔を立てるために雪子が利用されたこと、鶴子がそれを

容認したことなのだ。鶴子は幸子への手紙の中で、「話が成立するしないは二の次」とし、見合いに応じないと「兄さんが困る」と、雪子や幸子よりも辰雄の立場を重んじる。ここには、「晩年の父の豪奢な生活、蒔岡云ふ旧い家名、一要するに御大家であつた昔の格式に囚はれてゐて、その家名にふさはしい婚家先を望む結果、初めのうちは降る程あつた縁談を、どれも物足りないやうな気がして断りくし」(上・二) ていた鶴子の姿はない。

渡部は、敗戦時に雪子が初めて「敗者」の烙印を捺されたことを、日本の無条件降伏の寓意だと指摘していたが、柴田勝二は、この渡部の主張に疑義を呈している。その理由として柴田は、終戦時までに下巻を「七」章程度まで書き進んでいたとしたら、雪子が拒絶される成り行きは下巻に取りかかった時点で視野に入れられていたからだ<sup>(9)</sup>と述べる。柴田の指摘するように、雪子の拒絶が視野に入れられていたのであるならば、本家が持ち込んだ見合い相手が雪子を拒絶するという設定も視野に入っていたであろう。また、敗戦を見越して設定を変更することも可能であつただろう。だが、谷崎は雪子に対する拒絶、それをもたらしした鶴子の姿を、日本が敗戦を迎える前後の時点で執筆したのである。以上のことを踏まえるならば、日本の敗戦は、「敗者」の烙印を捺された雪子ではなく、これまでとは異なる「非常識」な振る舞いをする鶴子に重ねることができるとだ。

鶴子は、蒔岡家の長姉として常に「家運の挽回」(上・二十一)を考え、生きてきた。しかし、澤崎との見合いは、雪子に良い結婚相手を添わせることで「家運の挽回」を図るためのものではなく、辰雄や辰雄の姉である菅野未亡人の体面を保つためのものであつた。これを境とし、鶴子が「家運の挽回」に意識を向けることはなくなる。彼女は蒔岡家の長姉として「家運の挽回」に努めることを断念し、辰雄や辰雄の実家に対して意識を向けるようになるのである。この鶴子の姿にこそ、敗戦を回避することのできなかつた日本の姿が重なるのである。

### 三 蒔岡家の家業

ところで、蒔岡家は何を商売にしていたのだろうか。川本三郎は「何の商売をしていたかは明記されていないが、船場に多かつた絨織問屋のひとつだろ<sup>(10)</sup>」と指摘するが、その根拠については示されない。辰雄が銀行員であることや貞之助が計理士であること、蒔岡家と同じく船場に店を構える奥畑家が貴金属商であること、雪子の見合い相手の職業などは明記されるが、蒔岡家が何を商売にしていたのかについては、なぜか語られることはない。分家には「田足らん」(上・一)対策として強力ベタキシンの注射薬が常備されているのははじめとし、さまざまな薬が常備されている。妙子がお産に苦しんでいる際も、幸子は、「自家の秘蔵薬の中から、今ではいづれも貴重品になつてゐるコラミンと、プロントジールと、ベタキシンの注射薬を持つて出かけ」(下・三十七)る。分家には、「今ではいづれも貴重品」となつた薬まで所蔵されているのだ。さらに父は、「当時秀才と云ふ評判のあつた蒲原が学費に窮してゐることを聞き、人を介して援助の手をさし伸べ」<sup>(11)</sup>、「蒲原が独逸へ留学する時にも、帰朝して今の病院を開業する時にも、費用の一部を負担した」(下・二十)人物である。また、蒔岡家が店舗を構えていた船場は、薬に縁の深い土地である。一九三三(昭和八)年に谷崎は『春琴抄』を発表しており、その舞台は船場道修町の薬種商に設定されている。船場が薬と縁の深い土地であることを谷崎も承知していたであろう。薬と縁の深い船場に住み、医学生に援助をする父を持ち、多種多様な薬を所有していることなどを考え合わせると、蒔岡家の家業は薬種商であると推測することができる。

雪子の四人目の見合い相手として橋寺という男が登場する。彼は、「道修町の或る製薬会社の重役」(下・十三)である。橋寺の会社は、「堺筋から西へ一丁程這入つた道修町通りの北側に、土蔵造りの昔風な老舗が多く並んでゐる中で、それ一軒だけ近代風な鉄筋コンクリートの建物であるのが直ぐ眼に付」(下・十五)く外観である。薬種商を営んでいた蒔岡家にとつて、製薬会社の重役という見合い相手は、家業を再建するために最良の人物だといえよう。橋寺の魅力は職業だけではない。

「今迄に随分多くの縁談が持つて来られたけれども、何と云つても今度のが一番である、此方の希望する条件が総べて備はつてゐて、地位、身分、生活程度等も、馬鹿げて好過ぎたり悪過ぎたりすることもなく、ちやうど恰好のところ、――此れを逃がしたらもう今度こそ、二度と再びかう云ふ縁はないであらう」(下・十五)と幸子が賞賛するほど、すべてにおいて理想的な見合い相手なのである。「何とかして此れを纏めなければ」と考えた貞之助は「少し非常識になる」(下・十六)とは思ひながら、雪子を売り込むための手紙を橋寺に送る。しかし、この縁談は橋寺からの強い拒絶により破談となる。

さう云ふ丹生夫人の調子にもたゞならぬものがあつた。菌切れのよい東京弁の人なのが、興奮してゐるので一層テキパキした口調になつて、何だか知れないが橋寺さんがひどく怒つてゐる、僕はあんな因循姑息なお嬢さんは嫌ひです、あなた方はあの人を花やかだなんて云はれるけれども、何処に花やかなところがあるんです。僕は此の縁談はキツパリお断りしますから今直ぐ先方へその旨をお伝へ下さいと云つてゐる(下・十七)

澤崎からの拒絶とは異なり、橋寺は明確な理由を述べたうえで「因循姑息なお嬢さんは嫌ひ」だと雪子を強く拒絶する。見合い相手から雪子が拒絶されることに何かの寓意を読みとるのであれば、澤崎からの拒絶ではなく、より強い拒絶を味わうことになる橋寺との見合いに注目すべきであろう。貞之助は橋寺との縁談が破談になつた後、「妻には云はずに、自分の一存で」(下・十八)橋寺に手紙を送る。その末尾は次のような一文で結ばれている。

小生は、貴下がよき配偶者を得られ、雪子も亦良縁を得て、お互に此の不愉快な出来事を忘れ去る日が早く到来することを祈る者であるが、その暁は何卒又改めて御交際を願ひたい。折角貴下のような方とお近づきになつたのを喜んでゐたのに、こんな話まらぬことからお附合ひが出来なくなつては此の上もない損失であるから。(下・十八)

貞之助が破談になった見合い相手に手紙を送ることは、これまでになかったことである。雪子を強く拒絶した橋寺に対し、今後も「御交際を願ひたい」と貞之助が申し出るのは、製菓会社に勤務する橋寺が菓を商いとす時岡家にとって有益な人物であるからだ。橋寺との見合いは、五回ある見合いの中で唯一本家に知らされることはない。澤崎との見合いで辰雄や鶴子から「非常識」な扱いをうけ、不愉快な体験をさせられた幸子と貞之助は本家に頼ることなく、「家運の挽回」を図ろうと試みたのである。だからこそ、貞之助は「少し非常識」になると分かつていながらも橋寺に雪子売り込む手紙や、破談に終わった後も「改めて御交際」を申し込む手紙を認めるのである。

#### 四 終わりに

橋寺との見合いが破談に終わったあと、妙子は赤痢に罹り、生死の境をさまよう。幸子は、「単純で人の好い姉を、あまり驚かしてはと気づかひながらも、なるたけ妙子に憐憫が注がれるやうにと願ふ結果、つい幾分か病気の状況を大袈裟に述べた傾きはあるが、それでも大体自分の実感を偽らずに書いた」(下・二十一)手紙を鶴子に送る。この手紙に対する鶴子の返事はないが、「追っかけて」出した「第二の報道」(下・二十二)に対して次のような返事を認める。

実は今だから申しますが、私は先日のお手紙で多分こいさんは助からないものと思つてみました。それもまあ、当人は今までさんぐく人に苦勞をかけ、好き勝手なことをして来た罰が当たつたやうなものですから、さう云つては可哀さうですけれども、今死んでも仕方がないやうなものです。もしそんなことがあつたら、一体誰が引き取つて何処から葬式を出すことになるのか。兄さんは恐らく嫌だと云ふでせうし、幸子ちゃんの所から出す筋合いは尚更ないし、と云つてまさか蒲原病院から出す訳にも行かないし、私はそれを考えると胸が痛くなつて来て、……こいさんと云ふ

人は何処まで私等に迷惑をかける人だらうかと思つてゐたのでした（下・二十二）

幸子からの手紙を読み「胸が痛くなつて」いる鶴子であるが、それは妙子の病状を心配してのことではない。妙子の葬式をどこから出したらいいのかということを考え、死んでなお迷惑をかける妙子に対して胸を痛めているのである。澤崎との見合いと同様に、ここでも鶴子は妹たちの身の上よりも、自分とその夫の保身を優先するのである。鶴子のこの態度は、雪子と御牧との縁談が纏まつた際にも表れる。

姉はあの時大層な喜び方で、では雪子ちゃんも今度こそお嫁に行けるであらう、妹がさう云ふお家柄のところへ嫁げば、あたしも辰雄の実家に対して肩身が広いし、辰雄も鼻が高いと云ふもので、長い間待つたゞけの甲斐があつた（下・三十四）

鶴子は、雪子が無事に結婚できたことを喜ぶと同時に、夫の実家に対して面目を保つことができたことに安堵と喜びを感じている。蒔岡家の長姉としての責任を放棄した鶴子は、結末に至るまで、その責任を自覚することは決してない。

雪子の興入れが決まる前に、鶴子が幸子に手紙を送る場面が登場する。本作には、鶴子が認めた手紙が五通登場する。一通目から四通目の手紙は、幸子や貞之助からの相談に対する回答を記したものである。しかし、最後に登場する五通目の手紙は、筆不精である鶴子が自発的に、幸子に対して認めたものである。幸子はこの手紙に対して、「いつもよく／＼の用事でなければ文を寄越さない人なので、幸子は何事かと思つて封を切つたが、中は珍しくもたわいのないことが取り止めもなく書き連ねてあるに過ぎなかつた」（下・三十三）という感想を抱く。手紙には、「子供が皆大きくなって、手が放れたため、余暇に「時々お習字」をするための「先生の朱の入つた」「あなた方の書きつぶしたお草子」や、「捨てるやうな

ものや女中さんに上げるような」「肌襦袢や何か下着類の古い」ものを「無心」(下・三十三) する内容が認められていた。幸子はこの手紙に対して、次のような感想を述べる。

今迄姉の手紙と云ふと、此方を妹扱ひにして意見するやうな書き方をしたのが多く、幸子はいつも、訪ねて行けば優しい姉に、文の面では叱られてばかりゐたやうな気がするのであるが、さう云ふ姉がこんなことを云つて来たのは、ちよつと不思議であつたので、取り敢へず注文の品々を小包便で送り出したきり、直ぐには返事をした、めようと思ふにゐた。(下・三十三)

「訪ねて行けば優しい姉」は、幸子たちを「妹扱ひして意見する」厳しい面を持ち合わせていた。鶴子の厳しさは自分の子どもに対しても同様である。そのため鶴子のような躰方に慣れていない悦子は「伯母の折檻が始まると、脅えたやうな眼つきをして伯母の顔を盗み視る」(中・十五)。そんな悦子に対して、幸子は「自分達姉妹のうちで一番と云つてもよいくらい優しいところのある姉を、そんなことで悦子が悪く思ふやうになりはしまいか」(中・十五)と危惧を抱く。幸子は、厳しさと優しさの両面を備える鶴子を評価し、そんな姉に親しみを覚えていたのである。したがって、最後の手紙に眼を通し、そこに厳しさを喪失した鶴子の姿を見た幸子は、鶴子を「不思議」な存在、昔の姿とは異なる存在とみなすに至るのだ。この手紙の文面からも、長姉として妹たちを支える側に立っていた鶴子とその自覚をなくし、支えられる側に回ったことが分かるのだ。

鶴子は母を早くに亡くしてから、父と妹たちのために母代わりとして生きていた。父亡き後は蒔岡家の長姉としての責任を自覚し、常に「家運の挽回」を考えながら生きてきた。鶴子が六人もの子供を産んだのも、東京へ移住するのも、「家運の挽回」を意図したものであった。しかし鶴子は、澤崎との見合いを境に、蒔岡家のことではなく、辰雄や辰雄の実家

に対して意識を向けていく。鶴子の変化が生じるのは、日本が敗戦を迎える前後の時点においてである。このことは、敗戦を回避し得ない日本の姿に、「家運の挽回」を断念した鶴子の姿が重なることを意味する。鶴子が「家運の挽回」を断念した後、雪子は理想的な見合い相手である橋寺から強く拒絶され、無事纏まった御牧との結婚のために東京へ向かう列車の中で下痢に見舞われる。四姉妹のなかで誰よりも健康体であった雪子が、初めて病に侵されるのである。妙子は、三好との子供が死産に終わり、「此の家に預けて置いた荷物の中から、当座の物をひとりできそ〜と取り纏め、唐草の風呂敷に括つて」（下・三十七）住み慣れた分家を出て行く。「亡くなつた父親の陽気で派手な性質を誰よりも濃く受け継いでゐる彼女は、家の中の淋しいことが大嫌ひで、いつも賑やかに若やいで暮して行きた」い幸子は、「ちよつと普通の姉妹の観念では律し難い」（中・二十二）ものを雪子と妙子に感じている。二人との生活を何よりも大切にしてきた幸子だが、二人が結婚したことによつて、その生活に終止符が打たれる。鶴子の暮らす渋谷の家も、「子供たちが家を散々住み荒らして、豚小屋のやうにむさくろし」（下・三十五）いものになつている。物語が終末に向かうとともに、四姉妹たちは衰退の一途を辿る。その契機となつたのは、鶴子が「家運の挽回」を断念したことにある。したがつて、蒔岡家衰退の原因は長姉としての責任を放棄した鶴子の姿にこそ強く表されているといえるのだ。

### 注

(1) たつみ都志『細雪』の構図―滅びゆく「特性」への挽歌―（たつみ都志『谷崎潤一郎・「関西」の衝撃』（和泉書院、一九九二・十）。

(2) 谷崎潤一郎『細雪』瑣談（谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集 第二十五卷』（中央公論新社、二〇一六・九）。

(3) 注(1)に同じ。

- (4) 野口武彦『細雪』とその世界(野口武彦「谷崎潤一郎論」(中央公論社、一九七三・八))。
- (5) 山本健吉『細雪』の褒貶(河上徹太郎ほか『現代文芸評論集(二)』(筑摩書房、一九六七・十二))。
- (6) 渡部直己「雪子と八月十五日」『細雪』を読む(渡部直己「谷崎潤一郎―擬態の誘惑」(新潮社、一九九二・六))。
- (7) 柴田勝二「表象としての『現在』―『細雪』の寓意―」(『日本文学』第四十九卷第九号、二〇〇〇・九)。
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 注(7)に同じ。
- (10) 川本三郎『細雪』とその時代(1) 女が育てた阪神間文化(『中央公論』第百二十一卷第四号、二〇〇六・四)。
- (11) 本業史学会編『日本医薬品産業史』(薬事日報社、一九九五・十)において、関西ことに大阪を中心に薬の文化が発展していき道修町はその中心であったと説明されている。
- (12) 注(6)に同じ。

〔付記〕

※『細雪』の本文引用は、『谷崎潤一郎全集』第十九卷(中央公論新社、二〇一五年六月)、二十卷(中央公論新社、二〇一五年七月)を使用し、旧漢字は適宜改め、旧かなは原文のままとしている。

※本稿は二〇一七年三月二十六日愛知淑徳大学で行われた第二十一回「谷崎潤一郎研究会」における口頭発表「谷崎潤一郎『細雪』論―鶴子を視座として―」に基づき執筆したものである。発表に対して、ご意見ご教示を賜った方々に感謝を申し上げます。